

トマトは夏の野菜というイメージがあるが、花は暑さに弱く、暑すぎると実にならない。このため、8月に咲く花が実を結ぶ9～10月にかけて

未来を開く

青森産技センター報告

—43—

て、全国的にトマトが品薄になり価格が高くなる。農林水産省が2015年に行った調査によると、トマト1キの小

高品質のトマト作り

定植遅らせ夏・秋出荷



9～10月に収穫するトマトの養液栽培

コスト削減へ養液栽培

売価格は6月1日～9月6日までが624円だったのに対し、9月7日～11月1日まで826円と3割近く高かった。

本県は夏から秋にかけて収穫する夏秋トマトの主要産地である。本県産トマトは良質でおいしいと市場の評価は高く、東京都中央卸売市場の都道府県別取扱量は北海道と

1、2位を争っている。トマト農家は9～10月に出荷するために、夏は室温が40度を超えるビニールハウスの中で換気や水やりをこまめに行ったり、日光を遮るカーテンをかける等の高温対策を行っている。だが、トマトを5月に定植する一般的な栽培方法では8月になるとトマトの樹が弱るため、高温対策をしても暑さの影響を大きく受けてしまう。

また、水稲育苗後のビニールハウスを利用した省力・低コスト化の検討も進めている。一般的な土耕栽培のほか、整地した苗床をそのまま利用し、土を使わず肥料を水に溶かした養液を使った栽培について研究。養液栽培は、底に養液を大量にためておけば自然に吸収するため、電源設備がいらない「底面給水栽培」とした。一般的に養液栽培の導入コストは高額だが、水稲育苗箱や本県産の軽石「十和田砂」などを使って、通常の費用の3分の1以下に抑えられる見込みだ。

農林総合研究所では、夏場の生産安定性を高めるため、トマトを6月下旬に少し遅らせて定植し、9～10月に収穫する作りの研究を行っている。この方法では、8月でもトマトの樹が若く元気なため、暑さの影響を受けにくく、9～10月に品質の良いトマトを収穫できる。定植を遅らせると、栽培期間が短くなるため面積当たりの収量が少なくなるが、植え付け本数を増やすことで収量を維持した。

(農林総合研究所施設園芸部 齋藤雅人)

東奥日報 平成29年2月10日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。